

## 焼芋屋の少女

冷たい雨が一日中降り続いて、晩秋の暗い日曜日は静かに暮れようとしていた。私は雨に打たれながら暮色漂い始めた三鷹の街外れの通りを一人で歩いてきた。冷たく湿った私の心を温めてくれるものをさがしながら、しかし半ば諦めながら、雨に光るアスファルト道路を歩いていった。

私は、左手の屋並みの一角に目を留めた。バラック作りの鍍金屋の軒先に、三尺程の庇が突き出て、そこに雨が当って雫がたれている。その雫に体半分濡らしながら、サビついた焼芋器が狭苦しそうに納まって、生木をいぶしているような煙を、煙突から静かに吐いている。その傍らに一人の少女がうずくまって、小石で何か地面に書いている。古びたセーラー服に、すり切れたデニムのズボンをはき、背中には内から洩れた電気の光が鈍くさしていた。そのすべての背景から浮き出るように少女の長いふさふさした髪がひときわ立派にみえた。

私は百匁十三円の焼芋を買って十五円払うと黙ってそこを離れた。少女が売ってくれたのである。ほのかな芋の温もりが、雨に打たれて湿った心を、かすかに温めてくれた。

ふと、人の気配を感じてふり向くと、少女がそこに立っていた。

「これ、おつりです」と言っ、二枚のアルミ貨を差し出した。走ってきたのか、小さく息をはずませながら、雨に打たれる目をしばしばさせて、少女は私の顔を見上げた。小学校三、四年生位だろうか。その白い美しい顔の後ろにかなり暮色が濃くなっていた。賢そうなその顔立ちには、生きる重さをすでに感じとってしまったのか、あどけなさにきびしさがにじんでいる。白い大きめの歯をみせて表情だけで微笑むと、少女はまた走って行って軒先にうずくまり、こちらを見て僕が角を曲がるまで手を振っていた。

(一九五六・一〇)